

田園回帰の流れ

先日、ZOOMを併用しての会議に参加したときの話。実質的に会議が終わったところで、若干の時間的余裕があったことから、参加者の各々に近況を伺ってみた。その中の一人H氏は和歌山県の中山間地域にある那智勝浦町、旧色川村に住む。H氏の話では、色川では若い人たちが増えてきているとのことで、田園回帰の流れが続く中、コロナ禍でこれが加速しつつあるように受け止めた。

田園回帰組で70歳前後のH氏は、そうした移住者たちの世話や、もともとそこに住む人たちとの調整役として忙しく、苦勞も多いのではないかと質問してみた。ところが、答えは若い人たちどうしでそれなりにやっております、年寄りの出る幕はないとのこと。

地域によって大きな差

この話を受けて思い出したのが、数年前のことではあるが、長野県上伊那郡にある中山間地域を

調査した時の話である。ある街道筋の北半分にあるA地域と南半分にあるB地域、そしてトンネルを越えて東にある別の川筋に広がるC地域に分けて、担い手問題を中心に比較調査を行った。

A地域は江戸時代に陣屋も置か

時流を読む

地域維持を左右する団塊世代

農的デザイン研究所代表 蔦谷 栄一

の、担い手の高齢化・離農等は著しく、地域そのものの維持が危ぶまれかねない状況にあった。しかし、そうした状況を逆手にとって水田の基盤整備を断行し、経営の集約化をすすめてきた。

ここで特にA地域とC地域を比

れたところで、稲作が主の農業が行われ、3地域の中では一番担い手が揃っていた。B地域は養蚕からリンゴに転換し、特定の担い手によってリンゴの産地化が進んできた。そしてC地域は稲作と若干の野菜が生産されてはいるもの

較して特記しておきたいのが、C地域では外部からの移住や新規就農が続き、子どもたちも増え、地域全体の人口も増加しつつあることである。とにかく外部から人が来てくれればありがたい、ということ、これを皆で受け入れ、応

援するC地域の気風が大きく影響しているように感じられた。

これに対して、A地域では担い手が頑張っている一方、新規就農者が来ても、何ができるか様子見するくらいが強かった。自然農法に取り組む某氏に対して、地区内の会議で長老が「畑に草を生やして見苦しい」と叱責したという話も耳にした。そのA地域では人口は減少が続き、基盤整備もすすまず、停滞が続いたままだ。

時には必要な「頑張らない勇気」

先のH氏は、「頑張っている人ほど、農業は俺の代で終わりだ」と言いがちだと語る。今、団塊の世代が日本農業を支えていることは確かだ。しかし当然のことながら、世代交代なくして地域維持は困難だ。団塊の世代も元氣な間に、新規参入を受け入れ、跡継ぎを育成していくことが欠かせない。頑張ることは大切であるが、時と場合によっては「頑張らない勇気」「若い人に任せる勇気」も必要だ。